

# 日本語の節比較構文における島の効果

吉本真由美

## 1. はじめに

英語における比較構文は、**than** や **as** 等に後続する要素と主節に現れる要素とを、数量や程度において比較し、その大小を述べる文である。**than** や **as** は句をとる場合と節をとる場合があるが、本稿ではとくに (1) のように節を伴う場合を扱い、以下、このような比較構文を「節比較構文」、**than** や **as** に導かれる節を「比較節」と呼ぶ。

- (1) a. The galaxy contains more stars than the eye can see.
- b. My sister drives as carefully as I drive. (Kennedy 2002 : 553)

これまで、英語の節比較構文における比較節には **wh** 疑問文との類似性が見られることが指摘されてきた (Chosmky 1977, Izvorski 1995, Kennedy 2022 等)。例えば (2) のような節比較構文は文法的であるのに対して、(3) (4) に見られるように、比較節内に島 (Ross 1986) が生じると、その節比較構文は非文となる。(3) は複合名詞句の島、(4) は **wh** の島を含む例であり、比較要素がその島 (斜体部分) の中にある場合に非文となることがわかる。

- (2) a. Michael has more scoring titles than Kim says he has.
- b. Michael has more scoring titles than Kim says Dennis plans to get tattoos.
- (3) a. \*Michael has more scoring titles than Dennis is *a guy who has*.
- b. \*Michael has more scoring titles than Dennis is *a guy who has tattoos*.
- (4) a. \*The shapes were longer than I wondered *whether they would be*.
- b. \*The shapes were longer than I wondered *whether they would be thick*. (ibid. : 558、斜体は筆者)

(2a) と (3a) では得点王タイトルの数が比較されている。比較節の **has**

の目的語に該当する *scoring title* が、(2a) のように島の中になければ文法的であるが、(3a) のように島の中にあると非文となる。(2b) と (3b) ではタイトルとタトゥの数が比較されており、比較節内の *tattoos* が島の中にある (3b) は非文となっている。(4) でも、*be* 動詞の後ろの比較要素である *long* や *thick* が島の中にあるために非文となっている。

また、*than* の後に *what* が顕在的に生じる方言があることも指摘されている<sup>1</sup>。

- (5) a. We own more books than *what* they do.  
 b. We own more books than *what* we own magazines.  
 (Izvorski 1995 : 211)
- (6) a. John is taller than *what* Mary is.  
 b. John is taller than *what* Mary told us that Bill is.  
 (Chomsky 1977 : 87)

こういった事実から、英語の比較節内では演算子移動が（非顕在的にはあるが）起こっていると分析されてきた。例えば (7a) の例文は (7b) のような移動が想定できる。

- (7) a. The galaxy contains more stars than the eye can see. (= 1a)  
 b. The galaxy contains more stars than [<sub>CP</sub> [<sub>DP</sub> **d-many stars**]<sub>i</sub> the eye can see *t<sub>i</sub>*].

(7a) のような比較構文では、(7b) の比較節に見られるように、*see* の目的語（太字で表している、非顕在的に存在する名詞句）が CP 指定部に移動している<sup>2</sup>。このような演算子移動を想定すると、島の内部に比較要素 (*d-many stars*) が現れたときに非文となるという事実が捉えられる。

一方で日本語の比較構文に注目すると、こういった演算子移動が英語の比較構文と同様に生じているかどうかという点について、これまで先行研究では統一的な見解を得ていない。そこには、日本語の比較構文において島の効果が確認される場合とされない場合があるということが関係している。そこで本稿では、日本語の比較節内に島が生じた場合の例を観察し、移動分析が妥当かどうか考察したい。以下、第2節では島の効果が見られる用例と見ら

れない用例を観察する。第3節では島の効果が見られない用例の存在が移動分析への反証となることを踏まえ、島の効果が見られた例文が非文となる原因を考察する。第4節では、第3節の観察に反して移動分析をとることが妥当であることを示す現象を確認し、第5節において、移動が起こる比較構文と移動が起こらない比較構文の2種類の比較構文が存在するという可能性を探る。

## 2. 日本語の節比較構文と移動分析

日本語の比較節内で演算子移動が起こっているかどうかを検証するにあたって、本稿で主に扱う日本語の比較構文の種類を確認しておきたい。日本語は英語と異なり、*more* や *-er* に該当する比較形態素を持たない。このため、「～より」「～のほうが」「～以上に」等の要素で比較を表現する。また、(8)のように、比較対象を名詞のみで表す例が日本語の比較構文においては典型的であるが、(9)のように文を伴う例も見られる。

- (8) a. ジョンは [メアリより] 多くの本を持っている。  
 b. [メアリより] ジョンのほうが多くの本を持っている。  
 c. [メアリ以上に] ジョンは多くの本を持っている。
- (9) a. ジョンは [メアリが持っているより] 多くの本を持っている。  
 b. [メアリが持っているより] ジョンのほうが多くの本を持っている。  
 c. [メアリが持っている以上に] ジョンは多くの本を持っている。

日本語で比較を表現するストラテジーとしては、このようにいくつかの型があり、それぞれの特徴が異なっているが、いずれにおいても英語の比較構文と同様に句を取ることも文を取ることもできる。本稿では主に (9a) のような「より」が文を伴う例を扱い、(8c) (9c) のような「以上に」を含む比較構文の用例も第5節で挙げて観察する。

次に、日本語の節比較構文でも英語と同様に演算子移動が見られるかという点について議論したい。日本語の比較節内でも演算子移動が起こっているとする先行研究 (Kikuchi 1987, Watanabe 2003 等) では、以下のように、日本語の比較節内に島が生じた場合、その比較構文は非文となるという事実を指摘している (以下、*ec* の表記は筆者によるものである)。

- (10) a. ジョンが[メアリーが *ec* 持っているより (も)]たくさん本を持っている。 (Kikuchi 1987:2)
- b. \*[その机で *ec* 読んでいた人]をジョンが殴ったよりも]ポールはたくさん本を読んでいた。 (ibid.: 7)
- c. \*[ジョンが *ec* 読んでいた時に]地震が起きたよりも]ポールははるかにたくさん本を読んでいた。 (ibid.: 7)
- d. \*[みんなが[なぜポールが *ec* 読んだか]不思議に思っていたよりも]ジョンはたくさん本を読んでいた。 (ibid.: 18)
- e. [[[ジョンが *ec* 読んだと]言われていると]トムが噂しているよりも]メアリーはたくさん本を読んでいた。 (ibid.: 6)
- (11) a. [[ジョンが *ec* 読んだと]トムが噂しているより (も)]メアリーがたくさん本を読んでいた。
- b. \*[ポールが [*ec* 読んだ人]に会ったよりも]ジョンがたくさん本を読んだ。
- c. \*[みんなが[なぜポールが *ec* 読んだか]知りたがっているよりも]ジョンがたくさん本を読んだ。

(Watanabe 2003 : 526)

(10a) の節比較構文が文法的であるのに対して、(10b) の「その机で読んでいた人」のように複合名詞句を形成しているものや、(10c) の「ジョンが読んでいた時に」のように副詞節を含むもの、(10d) の「なぜポールが読んだか」といった間接疑問文 (*wh* の島) を含むものはすべて非文となっている。このように、比較する要素 (上記の *ec* の部分) が島の中に生じる場合は非文となることがわかる。これに対して、(10e) のような埋め込み節が含まれる場合は非文とならない。(11b-c) でもそれぞれ、複合名詞句、間接疑問文の中に比較要素が生じており、いずれも容認されないことが確認されている。これらの例から日本語の比較節では英語と同様に *wh* 疑問文と類似の特徴を見ることができる。

しかし、こういった島の効果が日本語の比較構文には見られない場合があるという点も指摘されている (上山 2004、Beck et al. 2004、Hayashishita 2009 等)。(12a) では複合名詞句、(12b) では副詞節、(12c) では間接疑問文の中に比較要素 (*ec*) が含まれているが、いずれも容認される例である。

- (12) a. [[一ヶ月で *ec* 読破した人] をジョンが羨ましがった] よりたくさんのページ数をメアリーは一週間で読破した  
b. ポールは、[[ジョンが *ec* 申請している時に] 会社がつぶれた] よりはるかにたくさんの契約をおじゃんにしてしまった  
c. [みんなが [どうやってポールが *ec* 読んだか] 不思議に思った] よりも、ジョンはたくさん本を読んでいた
- (上山 2004 : 55)

また、(13) は Beck et al. (2004)、(14) は Hayashishita (2009) からの例である。これらの例でも、複合名詞句の中に比較要素がみられる。

- (13) [[*ec* 暗記した英単語] が全く試験に出なかった] よりももっとかわいそうな学生がいた。 (Beck et al. 2004 : 319)
- (14) (メアリーはめったに人や物事に文句を言わない人である、という文脈で) ジョンは [[メアリーが [(それを) 買った政治家] に税金泥棒と文句をつけた]] より高い車を買った。 (Hayashishita 2009 : 88)

(10) - (11) と (12) - (14) との対比からわかるように、日本語の節比較構文では、比較要素が島の中に存在していた場合に容認される例と容認されない例がある。では、(10) - (11) のタイプと (12) - (14) のタイプにおいて容認性を分かつものは何か。次節では、(10) - (11) のように島の効果が見られるとされてきた例と、(12) - (14) のように島を越えているように見える例の違いについて論じる。

### 3. (10) - (11) が容認されない要因とは

島の制約に従わない例があることから、上山 (2004) は日本語の比較節の中では演算子移動が起こっていない場合があるという可能性を指摘している。それでは、島の制約に従っているために非文になっていると考えられてきた例は、なぜ非文となるのだろうか。そこには何らかの誤用論的な条件が関係しているかもしれない。たとえば (10b) では、「ジョンが殴った」ということがらと「本の冊数」は関連性が薄い。また、(10c) の「地震が起きた」ということがらも「本の冊数」とやはり関連性が薄く、読んだ冊数を比較する際に不必要な情報と言える。日本語の比較構文はこのように、語用論的な

要素が大きく関わっているのではないか。このことを実証するために、島の中に比較要素があり非文となっていた (10) から上記のような語用論的な問題を除外した例に変えて検討したい。以下、(15)–(17) の (a) の例文は島を含み非文となっている例、(b) の例文 (あるいは (c) の例文) は島を含んだままコンテキストを変えた例である。

(15) 複合名詞句

- a. \*[[ その机で *ec* 読んでいた人 ] をジョンが殴った ] よりもポールはたくさん本を読んでいた。 (=10b)
- b. ?[[ 図書室で *ec* 読んでいた人 ] を先生がほめたよりも ] ポールは { たくさんの / 難しい } 本を読んでいた。
- c. ?[[ 図書室で *ec* 読んでいた人 ] をジョンが馬鹿にしたよりも ] ポールはつまらない本を読んでいた。

(16) 副詞節

- a. \*[[ ジョンが *ec* 読んでいた時に ] 地震が起きたよりも ] ポールははるかにたくさん本を読んでいた。 (=10c)
- b. ?[[ ジョンが *ec* 読んでいた時に ] 先生にほめられたよりも ] ポールははるかに難しい本を読んでいた。

(17) 間接疑問文

- a. \*[[ みんなが [ なぜポールが *ec* 読んだか ] 不思議に思っているよりも ] ジョンはたくさん本を読んだ。 (=10d)
- b. ?? [ みんなが [ なぜ (あの) ポールが *ec* 読んだか ] 不思議に思っているよりも ] ジョンはつまらない本を読んだ。

(15b–c)、(16b)、(17b) は、(15a)、(16a)、(17a) の構造を保ったまま、つまり島の中に比較要素を入れたままでありながら、容認されている (もしくは容認度が上がっている)。例えば (15a) の「殴る」という行為から本の冊数の比較は想起されにくい一方、(15b) では「先生が褒めるほどの量の本 (あるいは難易度の本) という程度が比較的想起されやすい。つまり、同じ構造でも、関連性のある語に変えると容認度が上がることがわかる。このように、島を含む場合の容認性には、談話機能上の制約が関連しているといえる。

このような、島を越えることができないコンテキストと越えることができ

るコンテクストの対比は、比較構文にとどまらず、関係節化においても同様の観察が得られる<sup>3</sup>。

- (18) a. \*[その机で *ec* 読んでいた人] をジョンが殴った本 (c.f. 15a)  
 b. [図書室で *ec* 読んでいた人] を先生がほめた本 (c.f. 15b)  
 c. [図書室で *ec* 読んでいた人] をジョンが馬鹿にした本 (c.f. 15c)
- (19) a. \*[ジョンが *ec* 読んでいた時に] 地震が起きた本 (c.f. 16a)  
 b. [ジョンが *ec* 読んでいた時に] 先生にほめられた本 (c.f. 16b)
- (20) a. \*みんなが [なぜポールが *ec* 読んだか] 不思議に思っている本 (c.f. 17a)  
 b. ??みんなが [なぜ (あの) ポールが *ec* 読んだか] 不思議に思っている本 (c.f. 17b)

島の効果が見られる比較節をもとに関係詞節化をした場合は島の効果が見られ、島の効果が見られない比較節をもとに関係詞節化をした場合は島の効果が見られない。つまり、比較節における島の効果は関係詞節化における島の効果と連動している、もしくは比較節も関係節も同様に談話的な制約上の要因で容認性が決定されているといえる。もし、(10) – (11) タイプの節比較構文が容認されない原因が関係詞節化ができないからだとすると、上山 (2004)、Beck et al. (2004) の主張するように、比較節が名詞句をなしている可能性もある。いずれにしても、島の効果が見られない節比較構文の存在は、移動分析への問題となる。

#### 4. 移動分析を支持する意味的特徴

第3節で比較節が名詞句をなしている可能性について言及したが、意味的な観点から観察すると、日本語の比較節は名詞句が示すような個体 (individual) ではなく程度 (degree) を denote するものとも考えられる。英語の比較構文の比較節は degree (程度) の max 値を denote すると考えられるが、こういった分析の根拠のひとつには、いわゆる Negative Island Effect が見られるという事実が挙げられる (c.f. von Stechow 1984; Rullmann 1995)。

- (21) a. \*John weighs more than Bill doesn't weigh.

- b. \*John weighs more than nobody weighs.
- c. \*John weighs more than few people weigh. (Rullman 1995 : 39)

(21a) の比較節が (22) のような意味をもつ<sup>4</sup>とすると、それが非文であることが説明できる。

(22) max ( $\lambda d$ . Bill does not weigh d-much)

(21a) が非文なのは (22) に示す degree の値が解釈できない、すなわち「ビルが持たない重さの最大値」がどのような値を指すのかが解釈できないからだと説明できる。このように、比較構文において Negative Island Effect が見られるのは degree の値が解釈できないからだと分析されている。

このような Negative Island Effect は日本語の比較構文にも見られる。

- (23) a. \*ジョンは [誰も買わなかったより] 高い本を買った。
- b. max ( $\lambda d$ . nobody bought d-expensive books)

(23a) が非文であるのは (23b) に見られるような「誰も買わなかった金額」の程度 (degree) が解釈できないからである。すなわち、日本語の比較節の解釈には degree が関係していると考えられる。このように、Negative Island Effect が見られるということから、英語の比較構文と同様に日本語の比較節でも degree を denote する (semantice type が e ではなく type d となる) と考えられる。

また、もし (23a) の比較節が名詞句なのであれば、(23a) は (24) と同様に容認されるはずである。

- (24) ジョンは誰も買わなかったのより高い本を買った。  
(Beck et al. 2004 : 290)

(24) は「の」を含み、名詞句を形成している。(24) では、「誰も買わなかった特定の本」が存在し、その金額よりも高い本をジョンが買った、という解釈になる。もし (23a) の比較節が文の形をとりながら名詞句をなしているのだとしたら、(24) と同様に容認されるはずである。

さらに、Shimoyama (2012) が分析しているように、「の」を含む比較構文と節比較構文には解釈の違いも見られる。

- (25) a. 太郎は花子が欲しがっていたよりたくさんのおにぎりを買った。  
(Shimoyama 2012 : 90)
- b. 太郎は花子が欲しがっていたのよりたくさんのおにぎりを買った。  
(ibid. : 92)

(25a) では「花子が欲しがっていたおにぎり」が特定のおにぎりではなくても良いが (*de dicto* reading が可能)、(b) では特定のおにぎりが想定される (*de dicto* reading が不可能)。この解釈上の違いは、下記のような degree abstraction によって説明できる。

- (26) [op<sub>1</sub> than Hanako wanted (to buy) ~~t<sub>1</sub>, a~~ many rice balls]  
(ibid. : 90)

このような *de dicto* reading は、degree が「欲しがっている」よりも低いスコープをとる際に得られる。このように、(25a) には ((25b) と異なり) degree と他の要素とのスコープインタラクションが見られることから、日本語の比較節も degree denoting であるといえる。

以上、Negative Island Effect が見られることやスコープの相互作用を示す例は、Shimoyama (2012) にも指摘されるように、日本語の節比較構文には degree abstraction が起こっているということを示しており、統語的にはそれを可能にするような演算子移動が起こっていると結論づけることができる。

## 5. 局所的・非局所的な関係性

第3、4節で見たように、日本語の比較構文には移動分析を否定する性質と支持する性質が見られる。そこで本節では、移動分析の反例となった島を越えることのできる比較構文の特異性に着目し、これらが通常の比較構文とは異なる分類に属する、と提案する。その上で、通常の比較構文では演算子移動が起こる一方、この特異な比較構文では移動が起こらずに、*ec* の部分には *pro* が生じているという可能性を探りたい。

まず、島を越えることのできる比較構文の場合、通常の比較構文とは異なり、下記のような打ち消しができない (cf. 上山 (2004))。以下、(27a) は通常の比較構文、(27b) は島の効果の見られない比較構文である。

- (27) a. 太郎は花子が *ec* 読んだよりも多くの本を読んだ。  
(ok) しかし、太郎が読んだ本の冊数が多かったというわけではない。
- b. 図書室で *ec* 読んでいた人を先生がほめたよりもポールは難しい本を読んでいた。  
# しかし、ポールが読んだ本が難しかったわけではない。

(27a) に見られるような含意の否定は英語の比較構文でも可能であり、その点においても日本語と英語の比較構文の性質は一致している。しかし、(27b) のように *ec* が島の中に含まれる非局所的な例では、通常の節比較構文とは異なり、含意の否定ができない。第3節で確認した他の例 (16b, 17b) においても同様に、含意の否定が難しい。興味深いことに、Hayashishita (2009: 88-89) は下記のような島を含む例を挙げ、通常のコンテキストであれば (28a) の容認性は低いが、メアリーが車の販売員で、高い車を買う客にしかほとんど挨拶しない無愛想な人である、というような文脈においては (28b) が容認される、という観察をしている。

- (28) a. *????\** ジョンは [メアリーが [ (それを) 買った政治家] にあいさつしたより] 高い車を買った。
- b. ジョンは [メアリーが [ (それを) 買ったお客] に丁寧にあいさつしたより] 高い車を買った。

すなわち、(28b) の比較節の含む「それ」(車) の金額が高いことが含意され、「しかしジョンが買った車が高かったわけではない」といった含意の打ち消しを続けると不自然になる。同様に (17b) に挙げた例 ((29) に再掲) も、容認性はさほど高くないが、ポールが読書家で優れた本をたくさん知っている人であり、「あの (決してつまらない本を読みそうにない) ポール」といった人物像を想定すると、容認度が上がるように思われる。

- (29) ??[ みんなが [ なぜ (あの) ポールが *ec* 読んだか ] 不思議に思っている  
よりも ] ジョンはつまらない本を読んだ。 (= 17b)

ここからも、含意の打ち消しが不可能であり、ポールがつまらない本を読んだ (そしてそれよりもつまらない本をジョンは読んだ) という意味を持つことがわかる。

このように、含意の打ち消しの可否という点において、鳥の効果の見られない比較構文は通常の比較構文とは異なる性質を示している。このような含意の打ち消しが不可能であるという性質は、「以上に」を用いた比較構文にも見られる。

- (30) 太郎は花子が *ec* 読んだ以上に多くの本を読んだ。  
# しかし、太郎が読んだ本の冊数が多かったというわけではない。

(30) のように、「以上に」を用いた場合は、花子が多くの本を読んだことを前提とし、太郎はその冊数よりも多い冊数を読んだことを意味する。これは、「以上に」を含む比較構文が、「より」を用いた通常の節比較構文とは異なり、主節と比較節の程度差を直接比較するのではなく、文脈上、標準的とされる程度と主節の示す程度を比べた逸脱度合いと、比較節のそれとを比べて解釈されるからである。「以上に」を含む比較構文にはこのような性質が見られるため、(31) は、たとえ太郎が成人男性で太郎の息子が未就学児であったとしても容認される。

- (31) 太郎が背が高い以上に、太郎の息子は背が高い。

たとえば、太郎が成人男性としての平均身長より 10 センチ高く、十分に平均身長より高いとする。また、太郎の息子も同年代の子供の平均身長よりも高く、それが 20 センチ高いとすると、太郎の息子が太郎よりも背が低かったとしても (31) のように表現することができる。

これと類似した性質が、鳥を含む非局所的な比較構文には見られるという点で、通常の節比較構文 (「より」を用いたもの) とは異なるといえる。また、鳥を含む比較構文は、(15) - (17) に示したように完全に文法的ではなく、通常の節比較構文と比べて多少容認性が下がるものと観察されたが、比較節

に含まれる空所 (*ec* で示した部分) に「それ」等の顕在的な要素を入れると、容認性は少し上がる。

- (32) a. ?[[ 図書室で *ec* 読んでいた人 ] を先生がほめたよりも ] ポールは { たくさんの / 難しい } 本を読んでいた。 (=15b)  
 b. [[ 図書室でそれを読んでいた人 ] を先生がほめたよりも ] ポールは { たくさんの / 難しい } 本を読んでいた。
- (33) a. ?[[ ジョンが *ec* 読んでいた時に ] 先生にほめられたよりも ] ポールははるかに難しい本を読んでいた。 (=16b)  
 b. [[ ジョンがそれを読んでいた時に ] 先生にほめられたよりも ] ポールははるかに難しい本を読んでいた。
- (34) a. ??[ みんなが [ なぜ (あの) ポールが *ec* 読んだか ] 不思議に思っているよりも ] ジョンはつまらない本を読んだ。 (=17b)  
 b. [ みんなが [ なぜ (あの) ポールがそれを読んだか ] 不思議に思っているよりも ] ジョンはつまらない本を読んだ。

このことから、鳥を含む場合の比較節はあくまでも完全文をなしており(主語や目的語が空所になっておらず)、*pro* が含まれている可能性が考えられる<sup>5</sup>。このように仮定すると、鳥を含み容認されている特殊な比較構文は空所を含まず、ゆえに演算子移動も見られないと捉えることができる。その際、どのようにして *degree* を解釈するのかについては別稿を期したい。

## 6. 結論

本稿では、日本語の節比較構文に対して英語と同様の移動分析をとることができるかという点を、鳥の効果の有無という観点から分析した。複数の先行研究が指摘してきたように、比較節内の比較要素が鳥の中に存在する際に非文となることがあるが、一方でコンテキストを整えると、鳥の効果が見れない例も見られる。日本語の節比較構文は話者によって容認度が異なる傾向にあるが、前者が非文であるのに対して後者の容認度はたしかに上がる。この事実は日本語の節比較構文には移動が起こっていないことを示唆するものであるが、演算子移動 (とそれに伴う *degree abstraction*) の証左となる現象も見られる。このことから、本稿では、鳥の中に比較要素が現れる節比較構文と、鳥を含まない通常の節比較構文がそれぞれ異なった方法で派生する

ことを主張した。具体的には、前者は空所部分に *pro* を含み演算子移動を経ない派生を取ること、また後者は空演算子が移動して派生すると提案した。この提案は、前者が「以上に」を含む比較構文と意味的に類似した特徴を持ち、通常の比較構文とは異なる振る舞いを示す、特殊な比較構文であるという事実からも支持される。

## 注

- <sup>1</sup> 英語の方言のほか、ヘブライ語やアフリカーンス語でも同様に *wh* 要素が顕在的に比較節に生じる事例が報告されている (Hazout 1995、den Besten 1978)。
- <sup>2</sup> (7b) の比較節にある *d-many* は、数量を表す *degree* として非顕在的に存在するものとする (Bresnan 1973, 1975 では *x-many/much* として導入されている)。この *d-many stars* がもともと非顕在的な要素として生起するのか、あるいは削除によって非顕在化されているのかについては、本稿では議論しない。
- <sup>3</sup> 日本語の関係節と演算子移動を含む文の性質は類似している点と異なる点が見られる (c.f. Kuno 1973、Ishii 1991、Murasugi 2000)。
- <sup>4</sup> (22) は段階形容詞への測量関数分析 (Kennedy 1999 等) を参考に簡略化して記している。
- <sup>5</sup> Ishii (1991) では、日本語の関係節形成において、島の制約に従わないが弱交差現象が見られることから、基本的に移動が起っていると分析している。島を含む場合は移動が起らずに *pro* が空所に生じて非文となるのを免れる、と仮定している。

## 参考文献

- Beck, Sigrid, Oda Toshiko and Koji Sugisaki (2004) "Parametric Variation in the Semantics of Comparison: Japanese vs. English," *Journal of East Asian Linguistics* 13, 289–344.
- Bresnan, Joan (1973) "Syntax of the Comparative Clause Construction in English," *Linguistic Inquiry* 4, 275–343.
- Bresnan, Joan (1975) "Comparative Deletion and Constraints on Transformation," *Linguistic Analysis* 1, 25–74.
- Chomsky, Noam (1977) "On Wh-Movement," *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 71–132, Academic Press, New York.
- den Besten, Hans (1978) "On the Presence and Absence of *Wh*-elements in Dutch Comparatives," *Linguistic Inquiry* 9, 641–672.
- Hazout, Ilan (1995) "Comparative Ellipsis and Logical Form," *Natural Language and Linguistic Theory* 13, 1–37.
- Hayashishita, J-R. (2009) "Yori-comparatives: A Reply to Beck et al. (2004)," *Journal of East Asian Linguistics* 18: 65–100.
- Ishii, Yasuo (1991) *Operators and Empty Categories in Japanese*, Ph.D dissertation, University of Connecticut.
- Izvorski, Roumyana (1995) "A Solution to the Subcomparative Paradox," *The Proceedings of WCCFL* 14, ed. by Jose Camacho, Lina Choueiri, and Maki Watanabe, 203–219, CSLI Publications, Stanford, CA.
- Kennedy, Christopher (1999) *Projecting the Adjective: The Syntax and Semantics of Gradability and Comparison*, Garland, New York.
- Kennedy, Christopher (2002) "Comparative Deletion and Optimality in Syntax," *Natural Language and Linguistic Theory* 20, 553–621.
- Kikuchi, Akira (1987) "Comparative Deletion in Japanese," ms., Yamagata University.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Murasugi, Keiko (2000) "Antisymmetry Analysis of Japanese Relative Clauses," *The Syntax of Relative Clauses* ed, by Artemis Alexiadou,

- Paul Law, André Meinunger, and Chris Wilder, 231 – 63. John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
- Ross, J Robert (1986) *Infinite Syntax!*, Ablex Publishing Incorporation, New Jersey.
- Rullmann, Hotze (1995) *Maximality in the Semantics of Wh-constructions*, Ph.D. Dissertation, University of Massachusetts Amherst.
- Shimoyama, Junko (2012) “Reassessing Crosslinguistic Variation in Clausal Comparatives,” *Natural Language Semantics* 20, 83 – 113.
- von Stechow, Arnim (1984) “Comparing Semantic Theories of Comparison,” *Journal of Semantics* 3, 1 – 77.
- 上山あゆみ (2004) 「日本語の比較構文についての一考察」『文學研究』101, 45 – 67, 九州大学大学院人文科学研究院 .
- Watanabe, Akira (2003) “Wh and Operator Constructions in Japanese,” *Lingua* 113, 519 – 558.